聖書は誰に向けて書かれたのか

（日本人の救いのために）

2014 年１２月
西九州伝道所
佐々木正明

使徒パウロは、異邦人への使徒と呼ばれるにふさわしい仕事をしました。ユダヤの民族主義の虜になっていた福音理解を開放して、すべての民族に対する福音、普遍的福音の理解に変えたのは、まさに聖霊に導かれた彼の働きでした。私たち異邦人クリスチャンは、彼の働きに大いに感謝をしなければなりません。

とは言え、異邦人への使徒と呼ばれるパウロの働きは、主に神学的側面にあり、実際の伝道の働きによるものではありません。確かに彼はパレスチナに留まらず、異邦人の土地を広く行き巡りましたが、実際に彼の福音を聞いてそれを信じた大部分は、宗教的にも文化的にもすでにユダヤ化した人々でした。彼は伝道戦略として、行く先の町々でまずユダヤ人の会堂を訪れ、そこにいた人たちに語ったのです。会堂にいたのはユダヤ人とユダヤ教に改宗した人々、そして改宗にまでは至らなくても、すでに、ユダヤ教を敬い、ユダヤの文化の多くを受け入れていた人たちでした。

☆　☆　☆　☆

使徒の働きとパウロの書簡を読む限り、パウロが純粋な異邦人、すなわちユダヤの文化をまったく知らない人々に語ったのは、ごくわずかです。たとえ、キプロス島のセルギオ・パウロやピリピの獄吏のように、ユダヤ文化にあまり馴染みがなかったと思われるような人物でも、神の奇跡の働きを目の当たりにして、パウロの信じる神に畏れを感じ、聞く準備も受け入れる用意もできていた者です。

パウロが完全な異邦人の聴衆に向けて語ったのは、ルステラとアテネのことです。ルステ

ラでは、自分たちが神ではないことを告げることで精一杯のようでした。アテネではほんのわずかではありますが、改宗者を得ることができました。アテネでの説教などは、さすがに異邦人への使徒だと唸らせるものがあります。とは言え、アテネでの彼の説教は、異邦人に対するものとしては、まだまだ準備不足なところがあります。彼が比較的長期間留まったコリントでの働きには、多数の異邦人が混じっていた会衆を相手に、随分苦労をした様子が見て取れます。彼がコリントのクリスチャンたちに宛てて書いた手紙に、それが良く現れています。

パウロが実際の異邦人伝道では、あまり大きな働きをすることができなかったことは、マルタ島でのひと冬が物語っています。難船してマルタ島に上陸したパウロは、火にあたっていて、暖気で出てきたマムシに噛まれてしまいますが、まったく害を受けませんでした。それを見ていた人たちは驚いて、彼を神だと言い出します。それだけでなく、パウロは多くの病人を癒してとても尊敬され、島を離れる時には必要な品々を贈られてさえいます。ところが、そこにクリスチャンになった人が出たとか、会衆が生まれたなどという記述はありません。当然パウロは、そこで過ごした三ヶ月間、熱心に伝道したはずですが、記述するだけの実を得ることができなかったと思われます。まったくの異邦人、ユダヤ文化の影響が少しもない、しかも孤島の田舎に生きる粗野な人々の中では、ユダヤ教の影響の強い人々の中で得たようには、実を得ることができなかったのです。

パウロは確かに異邦人のための神学では大きな貢献をしました。しかし実際の異邦人伝道ではまだ力不足でした。それだけでなく、大きな貢献をしたと言われる彼の異邦人の神学も、まだまだ基礎が据えられただけ、土台が敷かれただけで、その上に家は建てられていません。未完成というか、十分には開花していないのです。この、マルタ島で得るべき実を得ることができなかった、パウロの未発達な異邦人の神学では、現代の日本人に対応することができません。マルタ島の人々が、ユダヤ文化から遠かったよりも、遥かに遠い異邦人文化に生き、それを独自に発展させて、特異な精神文化と宗教心を育み、自分たちのアイデンティティを作り上げ、それを誇りとしてきたのが日本人です。たとえ、異邦人への使徒パウロがやって来たとしても、簡単に外来の信仰を受け入れるとは考えられません。

私たちは今、パウロが基礎を据えた異邦人への福音をさらに発展させ、異邦人のための神学を築き上げなければなりません。遅すぎたといえば遅すぎたのですが、これからでも、絶対にやらなければならないことです。それができていないことが、日本の宣教が滞っている、大きな理由の一つだからです。

Ｉ．　聖書はだれに向けて書かれたか

「女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」（Ｉテモテ２：１１～１２、参照・Ｉコリ１４：３４）

これは、聖書に記されている使徒パウロの言葉であり、霊感された神の言葉です。今でもこの言葉をそのまま受け取り、女性が教会で語ることを禁止している団体も少なくありません。この言葉をとって、女性差別にあたる考えを正当化しているクリスチャンも、たくさんいます。そのような教会やクリスチャンが、「だんだん少なくなっているかな」と思える傾向にあるのは、幸いです。

この言葉は確かに霊感を受けた言葉、神の権威の下に書かれた言葉ですが、直接的には私たちに向けてではなく、第一世紀に生きていた人々に語られたものです。また、強いユダヤ文化の影響を受けて生きていた人々への言葉です。そのような特殊な事情を考察した上で、二十一世紀の現代日本に生きる私たちに適用しなければなりません。

以上のことは常識的であり、ほとんどの日本人クリスチャンたちも良く心得ています。聖書は、誰に向けて書かれたかを知っていなければ、正しく理解することも、間違いなく現代の私たちに適用することもできないのです。聖書には、時代や文化や人種、階級、性別などを超えた、完全な普遍的教えは記されていません。みな時間的、文化的な制約の中で書かれているのです。あえて例外というならば、イエス様によって最も大切な戒めと言われた、「神を愛する」という命令（マタイ２２：３７）が、極めて普遍的に近いものでしょう。でも、それでさえ、ユダヤ人に向けて、ユダヤ人の言葉で書かれているという事実があり、正しく理解するためには、当時のユダヤ人が用いていた「愛する」という言葉の意味を、よく知る必要があります。ただ、ユダヤ人という制約があり、３千数百年前という背景と言語の問題があったとしても、「神を愛する」という戒めは、誰にでも適用できる普遍性を帯びているということです。

イエス様に第二の戒めと言われた、「隣人を愛する」こと（マタイ２２：３９）は、もっと注意深い適用が必要です。なぜならここで言われる隣人とは、書かれた当時は、ユダヤ人のことだったからです。それを今、自分以外のすべての人と解釈するには、かなりの思索が必要です。この程度のことは、しっかりと学んだクリスチャンや伝道者、あるいは牧師にはよく知られていることです。とは言え、実際上はしばしば忘れられ、疎かにされていることです。

それ以上に困ったことは、旧約聖書が、直接的にはすべてユダヤ人に向けて書かれているという事実が、軽く見られていることです。用いられた言葉もユダヤ人の言葉です。本当のところ新約聖書の大部分も、ユダヤ人か、ユダヤの宗教文化を持った、異邦人クリスチャンたちに向けて書かれたものです。新約時代のクリスチャンは、たとえユダヤ人ではなくても、非常に強いユダヤ的宗教文化の影響を受けていたのです。そのような聖書を、あたかも、現代に生きている日本人である「自分に」、直接宛てて書かれたかのように読むのは、正しくありません。必ず、適用ということを考えなければならないのです。

ある教えは、大渓谷を橋渡しするような適用が必要であり、ある戒めはわずかの溝を埋めるだけの適用で済むかもしれませんが、適用をしなければならないという点においては、同じです。それで、まったくの未信者である日本人に、ただ聖書を手渡して読んでもらったとしても、なかなか理解できないのです。普通は橋渡しをしそこなって、自分には何ら関係のない古代の読み物として、片付けてしまいます。反対に、聖書を「神様からの手紙」として、直接自分に向けて書かれたものであるかのように、時代背景も文化も無視して読んでしまい、主観的な解釈に陥っているクリスチャンたちもいます。

実はこのような誤りは、ごく普通に見られることです。日本に来た宣教師たちも同じであり、西欧のクリスチャンや神学者たちにも変わりはありません。誰もが、聖書があたかも直接、自分たちに向けて書かれているかのように読んでいますが、それがどれほど大きな誤りであり、宣教の上で躓きになっているか考えたこともないようです。

この誤りの中で最も深刻で、広範囲に悪影響を与えているのが、「罪」の問題です。聖書はまさに全巻を通して、罪の問題をとり扱っています。聖書に記されている大部分の罪は、律法に違反する罪です。つまり、旧約聖書に記された律法を破る罪です。旧約聖書は、既に触れたように、ユダヤ人に与えられたものです。旧約聖書の中でも普遍的な事柄を扱っている部分は、すべての人々に適応できますが、こと律法に関しては、律法を与えられているものと、律法を与えられていないものが、明確に隔てられています。旧約聖書の律法に拘束されるのは、律法を付与されたユダヤ人だけなのです。（ローマ２：１２）　その律法に違反することが罪であり、律法の違反により明らかな罪の自覚を持ち、救い主の贖いを感謝して受け取ることができるのです。そういう意味で律法は救いに導くものであり、「養育係」であるとパウロはいうのです。（ガラテヤ３：２４）

では律法を与えられていない者に、罪は存在しないのでしょうか。そうではありません。「律法なしに罪を犯した人は律法なしに滅びる」と言われている通り、律法なしでも罪はあるのです。（ローマ２：１２）　ところがパウロは続けて、律法を与えられていない人でも、

生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、その人自身が自分に対する律法なのだと語り、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていると教えています。（２：１２～１５）旧約聖書を与えられていない異邦人も、旧約聖書の律法とは別の律法を与えられていて、所有しているのです。従って異邦人は、旧約聖書の律法によって裁かれるべきではありません。旧約聖書の律法を与えられていない者は、旧約聖書の律法によってではなく、「心に書かれている律法」によって裁かれるのです。

残念ながら、異邦人への使徒パウロの、異邦人のための神学は、先に触れたように、土台が敷かれただけで終わっています。彼の実際の宣教の働きが、まったくの異邦人だけを相手にしたことは少なかったために、まったくの異邦人を取り扱う神学の必要性を、あまり感じることがなかったのでしょう。そのため、異邦人の神学はそれ以上発展させられていないのです。ですから異邦人の神学にとっても、異邦人への宣教にとっても非常に重要な、異邦人に与えられている「旧約聖書とは別の律法」についての言及も、これで終わっています。

それでも私たちが、まったくの異邦人であり、未信者である日本人に向かって語るとき、旧約聖書の律法をもって、彼らを罪人扱いにすることはできないことが、ここで明らかにされています。旧約聖書はもちろん、新約聖書の教えをもっても、日本人の罪を云々言ってはいけないのです。旧約聖書の厳しい倫理的教えを持ち出して、罪人と決め付ける猛々しいやり方は、イエス様がユダヤ人に対して行ったものですが、同じことを私たちが日本人に行うのは間違いなのです。異邦人である日本人は、日本人の「心に記されている律法の要求」によって、あるいは「律法である自分自身」に裁かれることによって、罪人であるという自覚を持てるように、教え導かれなければならないのです。（ローマ２：１４～１５）

ではパウロが言う、「自分自身が自分に対する律法である」とは、どういうことでしょう。「心に記されている律法の要求」とは何のことでしょう。聖書には、この件に関して他に言及がありません。従って、この数節から神学を打ち立てることはかなり困難です。とはいえ、全く不可能なのではありません。聖書の一箇所の言及を用いて、他の聖書の教えと相反するような主張をするのは間違っていますが、その言及で、聖書の他の多くの記述と調和する考え方を持つことができれば、それはかなりの確率で、正当な神学と考えられるからです。

パウロが言う、「心に記されている律法の要求」、「あるいは自分に対する律法である自分」とは、人間の本源的善性のことではないかと考えられます。これは、人間が普遍的に持っているものとして語られていますから、誰かに教えられて持つようになった後天的なものではなく、人間としてあらかじめ持っていたもの、先天的なものと考えて良いでしょう。つまり人間としての本源的な姿です。人間の本源的姿は、「神に似せて造られた」という、創世記の記述に、明らかに示されています。（創世記１：２７～２７） 人間が創造されたとき、

人間には神に似た姿が人間の本質、あるいは本源的善性として与えられ、それが律法として残っているのです。その善性を持っている人間が、人間自身の律法の役割を果たしているのです。

プロテスタント神学の中には、人間の堕落と罪深さを強調し、神の救いの恵みを高々と謳い上げるために、人間の中の善い性質はアダムとエバの堕落によって完全に失われ、まったく残っていないかのような言い方をするものもありますが、聖書は、堕落の後にも人間には善性が残っていることを、前提にして書かれています。パウロが「私の内には善が住んでいない」と言っているのは、彼の主観的な信仰体験としての罪の自覚であって、人間全般の性質を語ったものではありません。（ローマ７：１８）

神に似せて造られた人間は、本源的にまた本能的に、いくつかの性質また能力を持っています。それは当然、すべて神に似たすばらしいものです。もっとも基本的なのは霊的な性質です。これがあるために人間はあらゆる動物と異なって、霊的な感覚と能力を持っています。そのために神を始め、霊的な存在を感じることができます。また、聖い性質です。それはあらゆる汚れを嫌うもので、善や正義という性質に関わってきます。正しいことを理解しそれを行う能力です。それから愛の性質です。人間は愛するものとして造られました。互いに愛し合うことが人間の生き方です。もっとゆっくり考えたなら、まだ他にも大切なものがたくさん出てくることでしょう。とにかく神に似せて造られたそれらの人間の性質が、重なり合い溶け合って本来の人間の性格、本源的人間性を作り上げています。

神に似せて造られた人間の本性は、たとえ堕落によって破壊され捻じ曲げられているとは言え、あるいは悪魔の支配のもとで抑制されているとは言え、すべての正常で健康な人間に備わっているものです。それは文化を超えたものです。これこそが、「自分に対する律法である自分」だと理解できます。パウロはまた同じ文脈で、「良心」について語っています。（V１５） 短い言及の中でただ一回しか出てこない言葉ですので、あまり確固としたことは言えないのですが、これは神に与えられた神に似た本性が、文化や状況の中で、それぞれ形を変えながら個々の人間の中に形成していく、倫理観と考えて良いように思います。

同じ愛するという本能を持っていても、文化によってその愛の表現は変わります。また、ひとつの物事に対する価値判断も変わります。家族や親族という人間関係、というより血族関係を最も大切に考える、フィリピンのような文化では、極端に言えば、家族を助けるために泥棒をすることさえ、「善である」と判断されることがあります。ところが、人間関係の重要性は認めながらも、一人ひとりの尊厳がそれ以上に謳われる日本のような文化では、愛はすべての人に向けられるべきだという理念が出来上がり、家族のために泥棒するなどということは、たとえ同情は呼んでも論外となります。

自己の確立と言うことを重んじるアメリカの個人主義文化では、三〇歳にもなって親のスネをかじって生きるなどということは、普通ありえません。それは恥であり、良心が痛むことだからです。一方、集団主義で頼り合うことを大切にする日本の文化では、良心に痛みを感じることなどありません。親が子どもを助けるのは当たり前だからです。

そのように、良心とは、人間の本性が、文化という環境によって形成された感覚であって、万国共通ではない、つまり普遍的ではないのです。それでいて、人間の本性から出てきたものとして、かなりの共通性を持ちます。それらを掘り下げていくと、普遍的な、本源的人間性に到達するのです。

さて、聖書が基本的にユダヤ文化に生きていた人たち、あるいは、かなりの程度でユダヤ文化を受け入れていた人々に与えられたものであって、日本人のような異邦人に向けて書かれたのではなかったという、原則的事実に立ち返って考えてみましょう。

聖書は、すべての人が罪を犯したと断言しています。この場合のすべての人はユダヤ人も異邦人も含めて、文字通りすべての人という意味です。ただし、ユダヤ人の罪は律法によって裁かれるべき罪であり、異邦人の罪は、律法によっては裁かれない罪です。そしてキリストが来たのは、罪人を救うためであって、そこにユダヤ人と異邦人の差はありません。すべての罪人です。

人がキリストをキリストと認めるには、つまり自分の救い主であると認めるためには、罪の自覚が必要です。しかし、ユダヤ人が罪人と定められるのは聖書である律法によってですが、異邦人が罪に定められるのは律法によってではなく、心に記された律法によってです。言い換えると、異邦人が罪を自覚させられるのは、ユダヤ人に与えられた律法によってではなく、心に記されている律法、人間の本性、本能的感覚、人間に与えられた神に似せられている部分によるのです。ですから、異邦人である日本人に、旧約聖書の律法や新約聖書の倫理を持ち出して、罪を自覚させようとするのは間違いです。そのような伝道の方法は誤っています。どれほど多くの日本人が、このような伝道に躓き、クリスチャンにならない決心をしてしまったことでしょう。日本人には日本人の本性に訴え、日本人の良心に語りかけなければなりません。

☆　☆　☆　☆

多くのクリスチャンは、牧師や宣教師を始め一般のクリスチャンたちも、聖書の教えを持ち出して、日本人の倫理的な低さ、曖昧さ、脆弱さを指摘します。日本人は多くの西欧の国

の人々と違って、聖書を持っていなかったという事実を無視しています。西欧人は長いキリスト教の歴史の背景をもって、キリスト教的な、旧約聖書と新約聖書を背景とした倫理を持っています。本来彼らの殆ども異邦人だったのですが、まるで、直接自分たちに付与されたかのような感覚で、聖書を読んでいます。そして、聖書を全然知らなかった日本人を、聖書をもって裁く間違いを犯しています。そのような西欧人に教えられた日本人クリスチャンは、彼らと同じように聖書をもって同胞を裁き、断罪するのです。

くり返しますが、聖書をもって日本人を裁いてはなりません。フランスの法律を持ち込んで、日本人を裁いてはならず、ロシアの良心をもって日本人をとやかく論（あげつら）ってはならないのと同じです。日本人だけでなく、聖書を持たなかった人々を、聖書で裁く間違いを犯してはならないのです。繰り返しますが、聖書を持たない人間は心に記されている律法、人間に与えられている神に似せて造られた本性に照らし合わせて、裁かれるべきなのです。しかもその時は、「良心」との絡みの上で判断されなければなりません。

ですから、律法を持たず、心に律法を書き記されている日本人に、聖書が教えている真理を説き、福音を伝えようとする場合、聖書の知識を持っている人に対するように、語ってはならないのです。そうではなく、神に似せて造られた人間の本性に語りかけ、心に記されている律法を呼び覚ますように、語りかけるべきなのです。見えない神の永遠の本性が理解できるように、被造物を通して語るべきです。なぜなら、被造物は神によって造られ、神の性質を宿すだけでなく、神ご自身がその内に潜んで居られるからです。（エペソ４：６）この被造物をもって、神はご自分について知り得ることを明らかにしてくださったのです。神の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性を、明らかに示しておられるのです。（ローマ１：１９）

Ⅱ．　日本人に罪を自覚してもらう

救われるためには、日本人も罪の自覚を持たなければなりません。罪の自覚なしには罪の悔い改めがなく、罪の悔い改めなくしては、新約聖書的な罪の赦しはないからです。少なくても私たち福音主義的神学を継承する者は、そのように教えられてきました。

では、日本人が罪の自覚を持てるようにするには、どのように話を始めるのが良いでしょうか。聖書の教えを振り回し、「罪だ、罪だ」と言って、子供の頃、母親の財布から１００円玉をくすねたことを思い出させても、それで日本人に罪の自覚を生じさせることはほとんどありません。本物の罪の自覚は「絶対に聖い存在」の前に出て、初めて生じるものだからです。

私たち、西欧のキリスト教神学に教えられて来たクリスチャンは、西欧のキリスト教神学の目でもって、日本人を見てきました。それで、日本人は、「絶対に聖い存在」を知らないと断定してきました。日本人は聖書を持たず、天地創造の神、絶対者の知識を持たないからです。たしかに日本人は、西欧のクリスチャンたちが持っているような、神についての「知的理解」はほとんど持ち合わせておりません。しかし、知的理解だけが理解ではありません。日本人は聖書が与える知識とは別に、「感覚的に絶対者を理解している」と、言うことができるのです。

西欧のキリスト教を学んだ人たち、あるいは普通の日本人でも、理性的で知的な考え方を大切にする人たちならば、いわゆる八百万の神々を愚かなものとして退けます。八百万の神々は、本来の日本人の信仰形態である汎神論が、通俗化したものと考えられますが、理性に受け入れられるのは困難です。それらの神々は、願いや欲求を届ける対象であり、願いが叶い欲求が満たされた時には、感謝の対象にはなり得ても、畏敬と礼拝の対象にはなり得ません。ですから大多数の日本人は、たとえ八百万の神々の一つに願掛けをしたとしても、畏敬と礼拝の対象としては、それらを否定するのです。そのようなものが、万物の霊長たる人間の敬愛と礼拝を受けるものとしては、ふさわしくないからです。

ところが自分は無宗教だ、何も信仰はしていないと公言する日本人も、信仰そのものを悪く言うことはなく、何の矛盾も感じないで神社に参詣します。そればかりか、どのように小さな祠でも、大きな神社でも、真摯な心持ちになって、何かに向かって手を合わせます。その時、多くの日本人が心に浮かべるイメージは、なんとも不確かな、よくわからない存在です。それでいて、自分が感謝すべき存在、自分がへりくだり、礼拝すべき存在、その前に出ると、自分の罪穢れが思い出され、自分は礼拝するにもふさわしくなく汚れた者であると、感じさせられる存在なのです。

しかも、小さな祠から大社に至るまで、日本人は同じ気持ちで参詣します。神社にはそれぞれ祀られている神々があると言われながら、実際は、参詣した神社に祀られている神が、一体どのような神であるかなどということには、まったく関心はありません。どの祠にもどの大社にも、同じ気持ちでお参りし、あたかも同じ方を礼拝するかのように、頭（こうべ）を垂れて柏手を打ちます。多くの神々を信じていると言われる日本人ですが、その心には強烈な一神教的感覚があるのです。

日本人の多くはこのような存在を「感じて」来ました。そしてこの存在が単なる「存在」なのか「存在者」なのかさえも良くは分からないまま、また大自然とこの存在とが、同一なのか異なるものなのかさえもわかないまま、この存在が自分に命を与え、育み、食べ物や着

物をはじめとする、すべての必要を与え続けてくださっている、大きく力強く慈悲に富み、優しく大らかで、人の営みを見て喜んでおられると感じて、かしこんで崇拝して来ました。その存在の前に出ると、理屈も何にもなく、ただ、「ありがたい」「かたじけない」と感謝をするだけなのです。

昔、西行法師が神宮（伊勢神宮の正式な名前）に詣でたとき、神宮が天照大神を祀る神社であることを承知の上で、「何事のおわしますかはしらねども、かたじけなさに涙こぼるる」と歌いました。それは、まさに多くの日本人の気持を表現したものです。仮に天照大神と呼ばれ、太陽の女神と言われて、そのために大社が建てられていたとしても、実体はその背後にあって、人間の英知や思考の及ばない高いお方であり、目に見えない存在であると感じていたわけです。

日本人は偶像というものを造らない、目に見えない神を目に見えないままに礼拝する民族です。また西欧人のように、神についてくどくどと説明することもない民族です。不完全な言葉と思考で無限の神を言い表すことは、偶像を刻んで神を表現することに近い、愚かなことで、神を軽々しく扱うことであると感じるからでしょう。神道のように偶像を造らない宗教が、世界にはまだ他にあるのかどうか定かではありませんが、とにかく、日本古来の宗教であり、日本人の精神的支柱である神道は、偶像を造らない宗教です。仏教が到来してからはその影響を受けて、通俗信仰として、まれに偶像を造ることもないとは言い切れませんが、あくまでも例外に留まっています。この偶像を作らないというのは、非常に特異なことなのです。

また、仏教が伝来してからは、これと集合して形を変え通俗的な神道が発生する一方、神道を擁護し、神道的な国家の保存を願って様々な神話が作られました。それらの神話は記紀に述べられています。しかし見えない神を物語で表現しようとする試みは、やはり偶像礼拝に近づくものです。目に見えない栄光の神が、まったく人間と変わらない、というより、むしろ人間に劣る、愚かな存在としてしか描かれていないのです。幸い神道では、これらの神話を「いわれ」として保存していますが、その物語に信ぴょう性は認めていませんし、そこに登場する神々を刻んで、偶像として礼拝することもありません。

異邦人の宗教について述べたとき、パウロも基本的に異邦人の宗教が偶像礼拝であると言って、激しく責め、断罪しています。（ローマ１：１８～３２）　ただしパウロは、異邦人の偶像礼拝を責めたとき、現代の多くのクリスチャンたちがやるように、十戒の第一戒を持ち出すことはしていません。彼は十戒がユダヤ人だけに与えられた、特殊な戒めであることをよく心得ていたと考えられます。ユダヤ人に与えられた律法で、異邦人を裁くようなことをしてはならないのです。パウロはモーセの律法で異邦人を裁くことをせず、異邦人にも与

えられている律法で、異邦人を裁いています。

　ところが、日本人の宗教である神道は、パウロが語る異邦人の偶像拝には、合致しないところがあるのです。日本人はすべての自然物に神が潜んでいることを認め、自然物を大切にしますが、自然物そのものを神とすることはほとんどないのです。神性を宿していると見られ、神を象徴するものとされることはあっても、神そのものとはされず、礼拝の対象にはならないのです。ご来光を拝むなどといって、太陽に手を合わせる人も、太陽そのものを神であると思っている人はまずいません。太陽が神々しく、あらゆる命の源となっているという事実から、神を象徴するものと捉えているのです。太陽を礼拝しているように見えながら、その背後におられる、大きく気高く、力と哀れみに満ちた存在、すべてのものに命を与えて生かしておられる存在を感じて、あえていうならば宇宙のあらゆるものの道筋である、「御天道さま」に感謝を捧げるのです。

　日本人はあらゆる被造物、つまり自然を通して、「神の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性を知り」、認めています。（Ｖ２０）それればかりでなく、「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、這うものの形に似たものと代えて」しまうことはなかったのです。（Ｖ２３）仏教的感覚が混じってしまったことにより、日本人の心に偶像がまったくないとは言えない状態になっていますが、いにしえからの日本人の精神的土台、あるいは支柱である神道には、偶像はないのです。

　このように日本人は、「神道」とひと括りにされている、極めて高い宗教意識、あるいは神意識を持っています。私たちはこのような日本人に対し、聖書の倫理をもって罪人扱いするのではなく、日本人の宗教意識とそれに関わる倫理観に訴えて、罪の自覚を持ってもらうべきなのです。

　日本人の倫理観の高さは、世界中の人たちを驚かせています。それは、多くのキリスト教国を自認している国の人々に、引けを取らないばかりか、しばしば彼らよりも高いと評価されています。それは単なる公衆道徳の域を出て、大災害などの折に見せる日本人の公徳心、更には戦争等の、いわば異常事態に於ける行動にまで及んでいます。

　日本の戦争責任を責め、日本人の残虐性を激しく責め立てる論調もありますが、それらの多くは、戦勝国（アメリカを主とした連合国）に都合よく書かれた歴史と、政治的プロパガンダであるということがわかってきました。戦勝国側がいかに経済封鎖をして、日本を開戦にまで追い込んだのか、その経緯もだんだん明らかになっています。大航海時代からつい最近に至るまで、いかに多くの西欧キリスト教国が植民地政策を推し進め、激しい人種差別をもって、どれほど多くのアジア人、アフリカ人、アメリカ人（先住民）、すなわち西欧キリ

スト教国以外の人々を苦境に陥れ、さらには殺戮したかも、徐々に多くの人たちの知るところとなっています。これらを見ると、日本の戦争犯罪さえも霞んでしまいそうです。（日本の戦争犯罪を軽々しく見るわけではありません。あくまでも比較の上のことです）　聖書を持たない日本人、神の律法を持たない日本人がどうして、聖書を持っている国々の人々と肩を並べるほどの倫理、あるいは彼らよりもむしろ高い道徳を維持してきたのでしょうか。

パウロの説明を読むと、世界中の人々の道徳的な廃頽は、ただアダムとエバの罪によるものだけではないことがわかります。人々の偶像礼拝の罪が、神の憤りを買ったためです。パウロは次のように記しています。「彼らは神を知っていながら、それを神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄を、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物に代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され・・・・・。そのために彼らは、してはならないことをするようになりました。」（ローマ２：２４～３２）　偶像礼拝の罪は、まさに「第二の堕落」とも呼ぶべきものです。人々の偶像礼拝の罪のために、神は彼らを、心の欲望のままに汚れに引き渡されたからです。その結果、はっきり記されているように、人間は性的敗退を始め、あらゆる汚れと罪に陥ったのです。

日本が、他の多くの国々のような道徳的廃頽に陥らなかったのは、ひとえに神の哀れみと恵みによるものと考えますが、その背後の理由は、日本人が偶像礼拝の愚行に走らず、目に見えない栄光の神を、目に見えないままに礼拝し、人知を超え言葉では表現できない無限の神を、言葉で説明せずに、ただ怖れかしこんで感謝と礼拝を捧げてきたからだと、考えられます。そういう意味から言うと、ギリシャ哲学の背景を持つ、西欧キリスト教の神論など、まさに偶像に等しいところがあります。神に対する畏れを欠き、神を言葉で切り刻むような冒涜を犯しているからです。

私たちは、日本人のこのような宗教心、あるいは神観というものを認め、それを基盤として語らなければなりません。多くの日本人は、自分たちがどれほど高度な神観を持っているかに、気づいていません。クリスチャンたちも気づかないまま、西欧的キリスト教の感覚で、一方的に神道的感覚を低級と決めつけ、嘲笑して来ました。まず、わたしたちクリスチャンが日本人の優れた神感覚に気づき、それを多くの日本人に気づかせて上げることです。そして彼らの心にある崇高な神意識、宗教観に目覚めさせ、そこから話していくべきです。

この大きな、目に見えない、哀れみと力に富む存在、生きとし生けるものに命を与え、生かしてくださっている存在を、私たちクリスチャンは、「天地の創造者」と呼び「私たちの神」として礼拝していることをお話してあげましょう。それから、私たち人間はこのお方の

恵みによって生かされ、支えられ、あらゆる良いもので恵まれてきたにも拘らず、余りにも感謝の心が少なかったことを思い起こさせてあげましょう。そのような恵みにまったく応えてこなかったことに、思いを馳せてもらいましょう。

私たち日本人は、たくさん恵みを頂いて生かされて来ました。養われ守られて来ました。それに対して私たちは、十分に感謝をしてこなかったことに気づきます。この目に見えないお方に、きちっと向かって、「有難うございます」とお礼を言ってこなかったことに思い当たります。私たちは見えないお方に不義理を重ねてきたのです。その不義理は、いつか、どこかで、どのようにしてか、お詫びしなければならないと感じます。

散々お世話になり、迷惑のかけっぱなしで、電話の一本も入れないまま、とうとう親の死に目にも会えなかったバカ息子が、歳を重ねてから両親のお墓の前で泣き崩れて、親不孝を詫びたという話を聞いたことがあります。私たち日本人は、親不孝ならぬ神不孝を続けてきたことを認めることになります。親不孝を詫びるように、神に不孝を詫びることが、神との正しい関係を持つには重要であることに気づきます。また誰に言われなくても、日本人はそのようなことを薄々感じていたために、春に秋に、感謝の祭りを行い、奉納行事を続けてきたのです。

日本人には、「罪」という何やらわからないものを「悔い改める」よりも、創造者である神に対する不義理と不孝をお詫びすることのほうが、分かりやすいと思います。そのほうがまた、罪の本質に触れているのです。さらにクリスチャン信仰を、西欧プロテスタント神学のような教理の知的受容としてではなく、神との正しい関係を持つこととして、心の通う人間関係のように、神と心を通わせることとして示してあげるのです。

Ⅲ．　アブラハムのように

異邦人への使徒であったパウロは、信仰による救いの教えを語ったとき、ユダヤ人の先祖であるアブラハムを模範に引き出しました。パウロはユダヤ人も異邦人も同じように、行いによってではなく、信仰によって救われるという真実を弁証するために、「アブラハムは神を信じた。神はそれを義と認められた」という、創世記の記述を用いたのです。アブラハムは、なにか良い行いをしたから義と認められたのではありません。ただ神を信じただけです。神にすがっただけです。神の約束を信じて神に頼っただけです。

ところでパウロは、このアブラハムの信仰に言及したとき、「アブラハムは悔い改めた」とは語っていません。「アブラハムはキリストを信じた」とも、「キリストの十字架が自分の罪のためだ」と信じたとも語っていません。もちろんアブラハムは、キリストよりも２千年

も前に生きた人ですから、キリストについて知りようがなかったのです。律法を与えられていなかったために、律法によって罪を教えられてもおらず、悔い改めも知りませんでした。神の独り子がすべての罪人のために、十字架で贖いの死を遂げてくださったなどということをまったく知らないで、ただ、神を信じて義とされたのです。キリストを信じてではなく、神を信じて義とされたのです。

異邦人にとってというか、キリストを知らない者にとって、ここでパウロが用いているロジックはとても大切です。パウロは通常、ユダヤ的論調、すなわち旧約の律法を前提とし、キリストの贖いを前提として、キリストを信じる信仰によって救われると主張しているのですが、その信じるだけで救われるという論証のために、引き合いに出したアブラハムの信仰は、キリストを信じる信仰ではなく、神を信じる信仰なのです。パウロにとっては、キリストは神でした。旧約のアドナイであり、ヤァヴエであり、また新約の主であり、キリストなのです。パウロは、何の矛盾も感じないまま、説明の必要性さえ感じないで、キリストを信じる信仰と、神を信じる信仰を同一のものとしているのです。

使徒パウロをはじめとする、初代のクリスチャンたちの中にあったユダヤ人的信仰の形態は、与えられた律法につちかわれ、律法に捕らわれたものでした。そのような信仰形態からは、当然、律法で預言され約束されたキリスト、律法の成就として贖いを成し遂げたキリストを信じる信仰が、いかに大切であるかを語ります。それがそのまま、西欧キリスト教諸国の人々の信仰観となって、世界中に広められました。本来、西欧キリスト教諸国の人々も異邦人であるはずなのですが、彼らには、自分たちは異邦人であるという自覚はあまりありません。その信仰観がそのまま日本にも伝えられたのです。

ただ偉大な異邦人への使徒パウロは、ローマ人への手紙を書いた時だけは、キリストへの信仰よりも、神に対する信仰を強調していますが、先に述べたように、パウロはキリストと神を同一視して、論が曖昧になったままに残しています。このあたりで私たちは、パウロの異邦人の神学にとどまり続けるのではなく、それを発展させる必要があります。パウロの異邦人の神学を土台として、その上に家を建てていかなければ、完全な異邦人である日本人に福音を受け入れてもらうのは困難です。

パウロの救済論によると、アブラハムはキリストを知る必要も、理解する必要もありませんでした。罪についても、悔い改めについても、贖いの働きについても、知らなくても良かったのです。たとえアブラハムが知らなくても、神がすべてをご存知だったからです。

救いは、アブラハムが何についてどれだけ知っていたかという、「知的行い」によるのではなく、神がキリストを通して成し遂げようと決めておられた、贖いの働きによるのです。

救いは理解によるのではなく、神に対する単純な信頼によるのです。信頼は知性の働きよりも、情の働きです。厚い情の持ち主であられる神は、ご自分が知的に理解されることよりも、信頼されることをずっと喜んで下さり、何よりも喜んでくださるのです。無限の神は、有限の人間がご自分を理解できるなどとは、思っておられません。信仰による救いとは、信頼関係による救いなのです。

誤解してはなりません。アブラハムの救いにキリストが必要ではなかったと言っているのではありません。アブラハムの救いは、キリストの十字架の贖いのゆえに可能だったのです。とは言え、アブラハムの時代、キリストのことはただ神のみがご存知でした。アブラハムは、まったく知らなかったキリストの贖いのゆえに、そして神を信頼したがゆえに義とされ、救いにあずかったのです。

アブラハムと同じように律法を持たず、キリストについても知らない日本人の救いは、どうなるのでしょう。まだ、律法を与えられた人に対する伝道のように、「キリストを信じなさい、罪を悔い改めなさい」と、言い続けなければならないのでしょうか。それとも、まず、天地の創造者であるお方について語るべきでしょうか。

キリストを知らなくても救われるならば、最初からキリストについて語り、罪と悔い改めと贖いについて語る必要はありません。神に頼れば良いのです。日本人が普通「神」と呼ぶ八百万の神々ではなく、ふと真面目になったときに感じて思い起こす、気高く大きく強く優しいお方を崇め、そのお方に頼って生きれば良いのです。その、頼っているということを、祈りによって表現し、賛美と礼拝とによって示して行けば良いのです。そして頼っているという事実を、この方に喜ばれる生活をすることによって実証して行けばいいのです。信仰は必ず行為に現れるからです。

日本人が頼るべきお方は、昔から日本におられたお方です。日本人が長いあいだ崇め尊んできたお方です。ただ日本人は、このお方が余りにも気高く尊く大きなお方であると感じ、あれこれと詮索することを畏れ、そっとしてきたのです。人間の言葉で弄（いじく）りまわしては畏れ多いと、触らないまま、わからないまま、礼拝してきたのです。

そのお方は、「私はある」とおっしゃる方として、聖書に教えられています。また、天地の創造者とも教えられています。日本人は、自分たちが心の奥底で感じて崇めてきたお方が、この天地の創造者だったのだと知れば良いのです。天地の創造者は、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、とも呼ばれています。随分前のことになりますが、筆者が良く知っていたクリスチャン女性が、主の身許に召されてからしばらく経ってからのことです。残されたご主人がとうとうクリスチャンになる決心をしました。そのときご主人は、どのように神

に呼びかけて良いのか分からずに、「美奈子が信じていた神様」と、自分の妻の名を持ち出して、神を特定して祈ったそうです。それでいいのです。初めはそれでいいのです。

旧約聖書には、日本語で「神」、あるいは「主」と翻訳されている呼び方があります。日本語の翻訳にも、神、主、創造者、天主といろいろです。ですから、あまり呼び方にこだわる必要はありません。要するに、聖書が教えている天地の創造者と、特定できればそれで良いのです。普通、多くのクリスチャンたちは、「天の父なる神様」と呼びかけているようです。これはもともと、イエス様が神を父と呼んだことから始まったようですが、優しく強い理想の父を、無限に大きく気高くしたようなお方というほどの意味でしょうか。

ただ、最初からキリストの話を持ち出しても、日本人には違和感があり、話がややこしくなるのが問題なのです。ややこしくなると、話す者も聴く者も大変苦労して、話を途中で諦めてしまうからです。それが日本人への伝道の困難さにつながっているのです。キリストの話を持ち出すと、キリストは実在したのかとか、キリストは神だったのか人だったのかなど、面倒な話に迷い込みます。罪のない誕生、十字架の死、贖い、そして復活と、恐ろしく難しい神学の話をしなければならなくなるだけでなく、「情欲をもって女を見るものは罪人である」などと言って、無理矢理に、聞く者を罪人に仕立てなければならなくなります。挙句の果てに、「イエス・キリストはあなたの罪のために十字架にかかって死んでくださいました。あなたはこれを信じますか」などという、見当はずれの質問をして、「ハイ」と答えさせようと四苦八苦します。

先にも触れたように、使徒パウロや初代のクリスチャンたちにとっては、キリストを信じることと神を信じることは同じでした。旧約聖書に育まれ、旧約聖書に馴染んでいた人々が、彼らと同じ背景を持っていた人たちを相手に福音を語ったとき、当然、旧約聖書で約束されていた救い主、キリストから話が始まりました。甦りのキリストを見た興奮が、いよいよキリストを語らせることになりまた。初代の教会の宣教が、キリストを語るところから始められ、罪の問題に話が及んだのは当たり前の事でした。

天地の創造者の存在は当然の前提だったために、ほとんど論じられることもありませんでした。自分たちが信じている神以外の、様々な神々を信じている人々への福音の提示の仕方は、まだまだ未発達だったのです。天地創造の神の存在をいかに語るか、どのように説明するか、どうしたら納得してもらえ、受け入れてもらえるかといった問題が、ことごとく、まだまだ未整理だったのです。

パウロの宣教をたどると、アテネのアレオパゴスでの説教に、その問題に取り組み始めているのがわかります。「さすがにパウロ」と思わせられますが、まだまだです。新約聖書は、

そのまだまだの時点で完結しているのです。いま私たちに必要なのは、その使徒たちの教えを発展させ、天地創造の神の存在を前提としない人々、あるいは、天地の創造者についてはおぼろげで曖昧な感覚しか持っていない人々に、福音をわかりやすく提示できる神学を確立することなのです。

もしも使徒パウロが、キリストを信じる信仰と神を信じる信仰を、同一のものとして語っているならば、私たちはいま、伝道の初めから、キリストについて語る必要はないはずです。最初に語るべきは「神」についてです。アレオパゴスでのパウロも、まず、神について論じるところから始めています。日本人にも、目に見えない至高のお方、永遠の創造主を提示することのほうが、キリストについて語るよりも先に来なければなりません。そしてこのほうが、キリストについて語るよりも、ずっと簡単なのです。なぜなら、優れた神意識を心に秘めている日本人は、すでにそのような最高神を感覚的に認め、崇めているからです。

日本人に必要なのは、初めからキリストと十字架を持ち出して、悔い改めの必要性を語ることではなく、絶対に優しく憐れみ深い大きなお方について語り、このお方に信頼して生きることの大切さを教え、感謝を捧げて礼拝することがいかに重要であるかを説いて上げることです。そして、感謝が足りなかった不義理をお詫びし、不孝を謝り、今後は、神のお喜びになる生活をするように、決心をしてもらうことです。このような神との信頼関係に入るならば、神は、キリストの贖いのゆえに日本人を赦し、受け入れ、永遠の命を与えてくださるのです。

アレオパゴスでのパウロは、多分、道を急いでいたせいか、かなり唐突に、キリストと罪と悔い改めと復活にまで話を持って行きました。その結果、わずかの改宗者しか起こりませんでした。もしも私たちが日本で同じことをしたならば、結果はもっと悪いでしょう。私たちはパウロのように先を急いではいません。ゆっくり留まって伝道しているのですから、慌てずに、時間をかけても良いはずです。

ここで、ちょっとばかり視点を変えて考えてみましょう。私たちの周辺には、キリストのことも十字架の出来事も、罪の意味も知らず、きちっと悔い改めもしていないのに、クリスチャンと認められている人が結構たくさんいます。私たちは伝道の実践の場では、キリストとその働きについての知識には、かなり融通を利かせています。早い話が、死ぬ間際に信仰を告白したような人を、私たちは喜んで受け入れ、洗礼をさずけ、天に送ります。きちっと知識を確かめ、信仰の告白を要求するようなことは、まずありません。それでも、神の憐れみによって救われたのだと信じます。それでいいのだと思います。

Ⅳ.　どうして日本だけ？

それにしても、日本の宣教は困難を極めています。つい最近、世界のアッセンブリー教会の、日曜礼拝会出席者総計に目が止まりました。五千六百万人を超えるようです。アジア、アフリカ、中南米で、圧倒的に数が増え続けています。この数字には、多分に「主催者側発表」的な臭いもしますが、日本のアッセンブリー教会の平均礼拝出席者数は、一万人を僅かに超えるだけです。まさに納得できない数字です。

このような現実の背後には、たくさんの理由があるにちがいません。その中の一つが、今まで述べてきた、聖書が誰に宛てて書かれたのかについての、取り違えです。でも、キリスト教信仰が圧倒的に広められている地域でも、同じような間違いで福音が語られていたはずです。それなのに、日本だけ異なっているのはどういうわけでしょう。

それは、日本という国が、キリスト教が入ってきた時には、既に日本人という大きなアイデンティティを持ち、共通の文化を持ち、国家としての形態を整えていたと言うことに関係があります。侵入してくる植民地主義者たちに対抗する、国家としての大きな力も、自分たちの強力なアイデンティティとなる宗教も、共通の文化も、進んだ技術力も持たない民族は、たちまちのうちに征服され、押し付けられた宗教を受容するようになりました。世界中の多くの国々がそうだったのです。

典型的な例として、フィリピンを挙げてみましょう。マゼランがフィリピンにカトリック信仰をもたらしたのは一五二一年のことです。当時のフィリピンはまだ国家として成立しておらず、百数十に及ぶ部族がそれぞれの言葉を用いて、暮らしていました。当然、小さな島々が寄り集まった地域の住民として、緩い協力関係とかなりの共通要素を持っていたとは言え、自分たちがひとつの国家に属しているというような、感覚も意識も文化も体制も出来ていませんでした。

そのために、マゼラン自身はフィリピンに到着そうそう、セブ島のすぐ横の小島、マクタンの酋長ラプ・ラプに殺されてしまったにも拘らず、スペイン人はたちまちの内に周辺の島々をまとめて支配し、スペイン王フィリップ二世の名を冠して、スペインと名付けたのです。それだけでなくフィリピンの人々は、侵略者がもたらしたカトリック信仰を大した抵抗もなく、むしろ喜々として受け入れ、カトリック国になってしまったのです。

マゼランが個人的なお守りとして持ってきた、サント・ニーニヨと呼ばれる偶像は、子供の頃のキリストを想定したものですが、いまや、ほとんどのフィリピンの家庭にレプリカが置かれ、お守りの役割を果たしています。自動車には、トラックだろうとバスだろうと乗用

車だろうと、みなミニチュアのサント・ニーニヨが飾られています。

フィリピンに遅れることおよそ三〇年で、カトリックが日本に到着した時には、日本はすでに統一国家としての形態を整え、西欧の武力に対しても一戦を交える気概を持っていました。カトリックの背後に、スペインの植民地主義があることを見て取った日本の為政者たちは、カトリック勢力を壊滅させてしまったのです。

次にキリスト教が日本に到着したのは、明治維新の頃ですが、カトリックとプロテスタントがほとんど同時に上陸しました。この時の日本は、武力や技術力という知的側面では西欧に遅れを取っていたとしても、その精神文化では決して劣っていませんでした。それで日本の為政者は和魂洋才を唱えて、西欧の知識だけを輸入し、魂、すなわち精神、あるいは宗教は、拒絶したのです。

日本の為政者たちが、西欧キリスト教を退け、日本の精神である神道を国家の柱として取り入れたのは、キリスト教が、当時日本に食指を伸ばしていた、植民地主義国家の宗教だったからです。日本人は、植民地主義国家、すなわち西欧キリスト教国家が、世界中で行っていたことを学び、その残忍性、非人間性を良く心得、キリスト教は日本人にはふさわしくないと判断したのです。

こうして、多くの発展途上国、あるいは民族の間では大いに進展した西欧のキリスト教も、日本では停滞を強いられることになったのです。西欧文化で再構築されたユダヤ文化のキリスト教、侵略と戦いと虐殺と抑圧のキリスト教は、和をもって貴しとなす日本の文化と宗教感覚に、受容されることはなかったのです。

私たちは、旧約聖書によって侵略と殺戮を正当化してきたキリスト教ではなく、愛の神、平和の神、慈しみと恵みの神を信じ崇めるキリスト教を伝えたいものです。そのために、異邦人の心に記された律法をもって、異邦人である日本人に、私たちの神を語る必要があるのです。

結び

新約聖書には、旧約聖書ではない、もうひとつの律法があることが、はっきり書かれています。私は伝道者としてまた宣教師として、普通のクリスチャンよりは幾分多めに聖書を読み、ローマ人への手紙は、神学生時代に暗唱してしまったものです。そして、この第一章から第二章に書かれていることも知っていました。しかしこれに心を止め、その意味することを真剣に考えるようになったのは、異邦人である日本人にいかに宣教すべきかと、真剣に思

いめぐらせるようになった、最近のことです。

　私の勉強不足からかとは思いますが、この点について書かれた文章を読んだことはありません。また、そのような説教を聞いたこともありません。異邦人の宣教を真剣に考えるならば、異邦人への福音の神学も、しっかりと構築されなければなりません。パウロは土台を据えました。私たちはその上に家を建てて行かなければならないのです。神学的素養を身につけた方々の、寄与を期待するものです。